

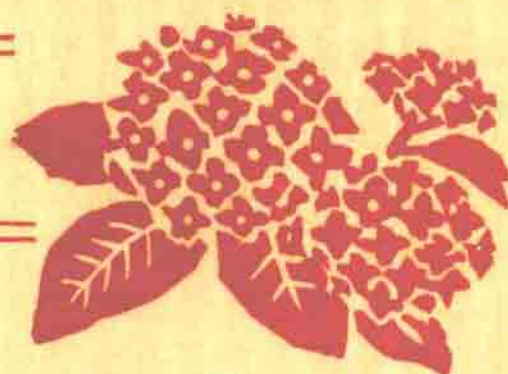


角川文庫

—3382—

びっくり箱殺人事件

横溝正史



角川書店



角川文庫

びっくり箱殺人事件 ばこさつじんじけん



昭和五十年十一月十日 初版発行
昭和五十年十一月五日 六版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著作者 横溝 正史 よこみそ せいし

発行者 角川 源義 かくがわ げんぎ

印刷者 高橋 茂 たかはし 茂

東京都中央区湊三ノ五ノ十

発行所

●東京都千代田区富士見二ノ十三
●一〇二 ●東京一九五二〇八

株式会社 角川書店 かどかわ しょうてん

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 正進社印刷・本間製本

0193-130417-0946(T)

びっくり箱殺人事件

他 一 篇

横 溝 正 史



目次

びつくり箱殺人事件

五

蜃気楼島的情熱

三三

解説

中島河太郎
二五三

びっくり箱殺人事件

作者曰く。この小説の主人公は、諸君も御存じのある有名な人物に似ているかも知れない。しかし、これは決してその人をモデルにしたわけではなく、主人公の言動のすべては作者の空想からうまれたものであり、したがって一切の責任は作者にあることを、一言ここに申上げておく。

第一章 怪物団若返る

さる高名な学者の説によるとある出来事の起るまえに起ったからといって必ずしもまえに起ったそのことは、後に起ったある出来事の前兆とは申さぬ。たとえば——と、その高名な学者先生はおっしゃるのである——自分は明治何年のうまれであるが、自分が明治にうまれたからって、必ずしもそのことは、関東大震災の前兆ではないと。蓋し、まことに明々白々たる真理である。

しかしあの晩、梟座ふくろうざの楽屋で起った、あの奇々妙々な怪物団毆うられ騒動——あれをしも、なアに、ありやア君、単にあの事件のまえに起っただけのことさ、ですませるだろうか。いや、どうもそうは思えないのである。あの変てこな、わけのわからぬ怪物団毆うられ騒動こそは、後に起っ

たビックリ箱殺人事件の前兆であつた、と、たしかにそう思われるのだが、さて、では、それがどういうふうに結びついていのかということになると、誰にもわからなかつた。あのビックリ箱殺人事件が起るまえに、なぜ怪物団諸君が殴られなければならなかつたのか、もしそれが後に起つた殺人事件の前兆であつたとすれば、どういう意味での前兆であつたか。——おシャカ様と犯人以外、誰にもそれはわからなかつた。そしてそこにこの事件の、なんともいえぬ変てこな味があつたわけである。

だが、こういうふうな思わせぶりの書方で読者諸君をつつていくことは、必ずしも筆者の本意ではない。筆者としてはこの物語の本題であるところの、ビックリ箱殺人事件のほうへ、たとい原稿紙の一コマ二コマでも早くとびこんでいきたい。いや少くとも、その事件の前兆であつたろうと思われるところの、怪物団殴られ騒動のほうへ、少しでも早く筆を持っていきたいのはやまやまなのだが、やれ待てしばしである。いきなりそれを書いていったのでは、話の筋が混乱するおそれがある。そこでもうしばらく読者諸君に辛抱していただいて、そもそも怪物団とはなんであるか、いや、それよりもまえに、梟座とはいかなるものであるか、まずそれから聞いていただかねばなるまい。

梟座というのは、丸の内にある中位の劇場である。以前は映画が専門で、その映画のあいまにおりおりアトラクションとして、専門のレビュー団がいと遠慮がちに手をあげたり脚をあげたり、つまり、レビューともショーともつかぬようなものを上演していた。即ち、その当時にあつ

ては、映画が主で実演は従であり、したがって専属レビュー団もまことに微々たるものであった。ところがである。戦争が終るとともに、がらりと天下の形勢が一変した。第一、主とすべき映画のかずがまことに少い。そこへもって来て、アトラクションの演出が、きわめて自由奔放となった。同じ脚をあげるにしても昔みたいに遠慮をしなくてもよいことになった。大胆不敵に、うんとばかり脚をあげても差支えないことになった。そこで衆座専属の踊子諸嬢も、この時とばかりに脚をさしあげて見せたところが、見物がたいそうよろこんだ。そして映画なんかどうでもよい、踊子たちの脚のあげぶりを見にいこうということになったから衆座は以前にまさる大繁昌となり、かつての微々たる衆レビュー団も、東都演芸界にサクサクたる名声をはせるにいたった。いやそれのみならず一座のスター紅花子嬢のごときは、脚のあげかた拔群であるというので、忽ち天下の人気者となってしまった。即ち、ここに於て衆座では、断然実演が主となったわけである。

そこで機を見るにピンなる衆座の興行主任熊谷久摩吉氏が、この機をはずさず一大グラントレビューによって、東都興行界を席卷せんものと、企画部の田代信吉や、レビュー作者の細木原竜三と鳩首協議の結果、デッチあげたのが「パンドーラの匣」衆座の予告を見ると、豪華絢爛たる百万ドル・レビューだそうである。

そこまではよかった。ところがである。この豪華絢爛たる百万ドル・レビューの舞台稽古を見ているうちに、さしも心臓をうたわれる熊谷久摩吉氏も、しだいに心細くなって来た。百万ドル

は百万円の間違いであるとしても、なおかつ少々お寒いように思われて来た。しかも今度はこれ一本で、二十日間押してみようという企画だけに、いっそう心細くなって来た。つまり自信がぐらついて来たのである。そこで企画部の田代信吉や、レヴェー作者の細木原竜三と、改めて鳩首協議の結果、やがていかなる名案をえたのか、熊谷久摩吉氏はたと膝をたたいて、

「よろしい。それでは私がじきじき出向いて交渉してみよう。なに大丈夫、先生はそれほど忙がしいという体じやなし、それに私がいけば、まさか首を横へはふらんだらう。細工はリュウリユウというところだ。まあ、安心したまえ」

と、ばかりに満々たる自信をもって、やって来たのが、吉祥寺にある深山幽谷先生の住居である。

「つまりですな。『パンドーラの匣』——ええ、もうそれだけで十分自信はあります。きょうも稽古を見て来たんですが、そりやア素晴らしいもので、それだけでもう十分観客を吸収する自信はあります。が、たとえにもいうとおり売物には花。錦上さらに花をそえるために、ぜひとも、先生に一役かって戴きたいんで」

「ははア、なるほど」

と、そのとき幽谷先生少しも騒がず、ムササビのような顔をなでながら、

「つまりなんですな。錦上さらに花をそえるために、おたくのレヴェーに私に出演しろと、こうおっしゃるんですね。そりやア、おたくのレヴェーが錦であることはよく承知しておりますが、

この私が花とはちとどうも……はっはっは」

と幽谷先生がらにもなく謙遜した。

「いや、そんなことはありません。先生はなにしろ当代の人気者ですからな。先生のカンバンが一枚加わると加わらんとでは、大きなちがひがあります。実を申しますと、うちの専属だけではちと心細いんでして……なにそれだけでも十分に観客は吸収してみせますが、やはり実は心細いんでして……」

熊谷久摩吉氏、どっちがどっちだかわかんことをいう。

「ええ、そりやアまあ、出ろとおっしゃれば出ますがね。幸い、来月はからだもあいてるし……しかし、私にやア脚はあげられませんぜ。いや、それも強いてあげろとおっしゃれば、あげて見せんことありませんがね、私が脚をあげた日にや、せっかくつめかけてるお客さんまで逃げ出しちまうおそれがある」

幽谷先生、案外正直である。

「いえもう滅相な。先生に脚をあげていただくなんて、そんな大それた野望は毛頭ございませんで……実は、先生にお願いしたいと申しますのは……」

と、そこで熊谷久摩吉氏が、ひらき直つての交渉というのはこうである。

そもそも——と、熊谷久摩吉氏はそこで咳払いをすると——戦後における人気の王者はなんと申してもスリラーである。映画もスリラーなら小説もスリラーでなければ夜も日も明けぬという

奇観を、目下この国は呈しとるデス。そこで私がつらつらと考えたのでありますが、このスリラー味をもって錦上さらに花を添えたらどんなものであるうか。つまり百万ドル・レビュー『パンドーラの匣』のなかへ、とどころスリラーを織りこんでいったら、どんなものであるうか。

「つまりですな。ゴーカケンランたる『パンドーラの匣』のなかへ鬼氣肌にせまるというようなスリラーをないまぜていく。奇麗な女の子が肌もあらわに脚をあげる、そのあいまい間に、先生ならびに先生の御一党のかたがたに、夏なお寒きスリラーを演じていただく。……と、こういう企画なんです、どんなものでしょうか」

「なるほど、対照の妙をえておりますな」

幽谷先生は素顔でも鬼氣肌にせまるような顔を、さらに鬼氣肌にせまるが如くしかめて見せた。「つまりわれわれは、おたくの諸嬢の奇麗なところを、いやがうえにも奇麗たらしめんがために出る、つまり引立て役みたいなもんですな。いや、なに、結構です。企画としてはたいへん結構ですから、やらんことはありませんが、で、台本は……？」

「さア、それがですね」

と、熊谷久摩吉氏は頭をかいて、

「実はそれも先生にお願いしたいと、こう思っているんですがね。聞けば先生はちかごろスリラーにたいへん御興味を持っていられるそうで……現に、そういう小説も二、三お書きになった

ということを伺っております。そこでことのついでに台本のほうも先生に書いていただく演出も先生にお願いする。つまりスリラーの部分は、全部先生におまかせしたい、と、こう思っているしだいなんです」

「私が台本を書く……？　そしていったい初日はいつなんです」

「それがその……来月の一日からなんです」

「来月の一日？　熊谷さん、あんた頭がどうかしてやアせんかな。来月の一日と、えろろ気安くおっしゃるが、来月の一日といえばあと三日しかありませんぜ。そのあいだに台本を書いて、稽古をして、舞台へ出る……？　ふうん……じゃな」

と、ここにいたって幽谷先生は愕然たるかおつきとなったが、ここでちよつと幽谷先生とはいかなる人物であるか、それを紹介しておくことにしよう。

世間の評判によると、幽谷先生は昭和の蜀山人だということである。蜀山人はたいへんな勉強家で、たいへんな物識りだったということだが、幽谷先生もたいへんな勉強家で、たいへんな物識りである。蜀山人はたいへんな酒仙であったということだが、幽谷先生も人後に落ちぬ酒仙である。蜀山人はたいへん飄逸洒脱ひょういつしやだつな人物のごとく伝えられているが、その実、たいへん常識円満な謹直居士きんじきだったということだが、幽谷先生もそのとおり、世間ではたいへん飄逸洒脱な人物のごとく信じているが、その実、たいへん常識円満な謹直居士である。

このことは幽谷先生の経歴を一瞥するとただちに判然する。幽谷先生ははじめ映画館の解説部

員、映画説明者、ひらたくいえば活ベンであつた。ところが押しよせるトーキーの波に、活ベンなる人種がこの世に存在しえないという事実が判明すると、先生は役者になつた。映画にも出るし、舞台にも立つ。そのかたわら筆をとつて小説も書くし随筆も書く。戦後は探偵小説も書いている。その他、昔とつた杵柄きづかで、ラジオ放送はお手のものだし、寄席へもちよくちよく出る。まことに多芸多能である。しかも、どの方面においても斯芸一流の域に達しているが、いまだかつて、大向うをわつとうならせるような、ハナバナしさを経験したことはない。これ即ち、幽谷先生の教養のしからしむるところだが、ひとつには、飄逸洒脱の裏がわにある常識円満なる謹直性が、先生をして、わつと大衆をわかせるような、ケレンを演ぜしめないからである。その代りに、線香花火式の芸人諸君とちがつて、先生の人気はいつまでたつてもおとろえない。常にある程度の人気は維持している。ちなみに幽谷先生は当年四十九歳——もっともこれは数年まえからそうだそうで先生は断然五十にならんことに極めてゐるのだそうである。

さて、その幽谷先生が愕然として声もなくひかえていると、そのときやおら、かたわらから膝をすすめた妙齡の美人がある。

「さつきから、お話はお伺いしましたが、するとうちのセンスが自作自演で、そして演出ということになるのでございますわね」

「ええ、まア、そういうことにお願ひしたいと思つておりますンで」

「つまり作者と、監督と、俳優の一人三役ですわね。そうしますと、報酬のほうも、もちろん、

そのようにお願い出来るンでございましたようね」

「ええ？ え、ええ、それは、もちろん……」

「それにこういう急ぎの仕事の場合、うちの先生はいつも多少色をつけていただくことにしておりますんですが、それも御承知でございましたようねえ」

ここにいたって熊谷久摩吉氏も、いささかどぎもを抜かれたかたちであつた。

「わっ、こ、これは手きびしいですな。お嬢さん、そ、それは……」

「あらあたしお嬢さんなどと呼んでいただきたくはございません。わたくしマネージャーの深山恭子でございます。どうぞそのおつもりで……パパあら、いいえ、センセ、熊谷さんがうんとフンパツして下さるそうですからひとつ無理でもお引受けしてさしあげたら……報酬のほうはのちほどあたしが熊谷さんと御相談して、はっきりきめていただくことに致しますから」

これが幽谷先生のひとり娘恭子さんである。

鳶が鷹をうむという言葉があるが、幽谷先生はそれを実演したのであるというのが、もっぱら世間の評判である。ことほどさように恭子さんは美しい。と、いうことはことほどさように幽谷先生は美しくないということになるが、先生もまた世間なみの親馬鹿であるから、別に気にもならない。恭子さんは美しいのみならず聡明である。しかしこの点に関する限り、幽谷先生は鳶鷹伝説に対して大いに不満を感じている、恭子さんの聡明さは、もっぱら自分からの遺伝であると、かたく信じて疑わないからである。

さて、恭子さんがいかに聡明であるか、それは父幽谷先生の、マネージャーをつとめてあやまたざる一事をもつてしても判然としている、もつとも恭子さんが強引に、父幽谷先生のマネージャーに就任したのはごく最近のことに属する、それまでは別にれっきとしたマネージャーがあった。ところがこのマネージャー氏いささかだらしがなくて、しばしば幽谷先生の金を使いこむばかりか、酔っぱらうと、あっぱは、うちの幽谷かあればダメじやよ、などと不遜の言辞を弄する習癖があつた。幽谷先生はもとより襟度大海の如きものであるから——と、いうよりも襟度大海の如く見られたいという虚栄家であるから、しよっぱい顔をしながらも、齒牙^{しが}にもかけんようなふうをしていたが、おさまらないのは令嬢の恭子さんであつた。きりりと柳眉を逆立て、再三父の考慮をうながしたが、先生がいつこう煮え切らんのをみると業を煮やして、ついにみずからマネージャー氏をチョンにして、さっさとその後釜に就任してしまった。このあざやかなお手盛りには、さすがの幽谷先生も驚いたが、なに、一月もすれば悲鳴をあげるさと、たかをくくっていたところが、なかなかどうして人は見かけによらぬものである。恭子さんのマネージャーというのが恐ろしく凄腕なのである。

幽谷先生の如きはたちまちノックアウトされちまってちかごろではマネージャーのいうことなら唯々^{いいたく}諾々である。それもその筈で、どんな悪質の興行師、出版屋、新聞雑誌記者諸公をむこうにまわしても、一步も退かず、ちようちようはっしとわたりあうという心臓だから、幽谷先生の鼻面とって引きまわすぐらいのことは朝飯前であつたろう。だが、こういったからとて、恭子さ